
恋に恋して

阪上克利

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
恋に恋して

【Nコード】
N1742Y

【作者名】
阪上克利

【あらすじ】
今までに出会ってきた女性との話を書いてみました。
恋の話もあれば、そうでないものもあります。

恋愛至上主義

1、恋愛至上主義

ボクの初恋はいつだっただろうか？

そもそも初恋というのはどういう状態を指すのか？

恋というのは魚の鯉ではなく、異性を好きになることである。

では恋人とは好きな異性のことを言うかというところとちよつと違う。この辺の定義が非常に難しいのだが、一般的に言えば、恋というのは片思いであろうが両思いであろうが、相手のことを思うと気持ちが落ち着かなくなり、その人とずっといたい、という思いである。

世の中には同姓が好きになったりする人もいるようだが、とりあえずそれはここでは枠の外に出して話すことにする。なぜかというと、ボク自身が恋愛対象として異性しか好きではないので、そういう人の価値観はまったく分からないので、同姓が好きになる人はこの枠からはずしたいと思う。

では恋人とは何か？

鯉人。

鯉のみにこだわって釣る釣師のこと・・・では断じてない。

恋人とは、恋とは対照的に、片思いでは成立しない。

一般論だが、一方方向の恋に関して、対象の異性を恋人と呼ぶのは通常はしないことだし、それが行き過ぎるとストーリーカーになる。だから恋人とは基本、両思いである。

では初恋というのはどういう状態を指すのか？

読んで字の如く・・・。

初めての恋だろう。

初めてだから当人はそれが恋だという感覚はないのかもしれない。

ん？

ということはボクの初恋はいつになるんだろう。

いくら考えても分からないことは考えないというのがボクの少ない長所の一つであるので、ここは忘れていこう。

もしかしたら初恋とは当人の知らないうちに終わっているものなのかもしれない。

高校時代は周りが男しかいなかったので恋愛とは無縁の生活を送った。

この生活は中学を卒業して、社会に出て、介護の仕事に就くまで続いた。

ボクはそういう生活が嫌だと思ったことはあまりなかった。

嫌だと思うことはなかったが、無意識のうちに恋愛がしたいと思っていたのかもしれない。小説を書くようになってから、しばらくボクの小説は主人公が女性であることが多かった。

どこかで自分の好みの女性を小説の紙面で活躍させることによって、ボクは擬似恋愛をしていたのかもしれない。

自分が書いた小説を友人の保田くんや茨木くんに渡していたのも、自分の恋愛を自慢するようなものだったのかもしれない。

高校、専門学校を通してはそれで満足だった。

しかし社会人になってからはそれでは満足できなくなっていった。社会人になってボクのは感覚はまともになって言ったともいえるが、今度は違うベクトルの方に価値観が意向していったために小説がまったく書けなくなった。

違うベクトル・・・。

つまり今までは恋愛などは自分とは無縁だと割り切って生活していたのだが、それとは違うベクトルに自分の思いが向いていき、恋愛

をしたい、と強く願うようになり、自分に彼女がないのがとても
恥ずかしいように思っていた。

今考えると恥ずかしい価値観である。

でも、これは若気の至りだけではなく、マス・メディアにも原因が
ある。

TV・映画・本を見ると恋愛物が売れるし、話題になっている。

そんなものを毎日繰り返し見ていると、ボクのような人は極端な例
かもしれないが多かれ少なかれ、恋愛しなければなんの価値もない
という考えになってしまふ若者は多いのではないだろうか？

この頃は保田くん、多田くん、茨木くんと4人で会えばいつも好み
の女性の話をしながら麻雀をしていた記憶がある。

ただ、その時の話は、好きな芸能人の話だったので満足できないこ
とこの上なかった。

社会人になった4人だが、ボクの生活が変わったのは、介護の仕事
に就いてからだった。

パンダさん

2、パンダさん

ボクが訪問入浴の仕事始めて1年ぐらいたった時の話。

最初の半年こそ苦勞もしたが、ちょうど1年ぐらい経ってボクはこの仕事に慣れ始めており、ようやくではあるが、周りを見回す余裕もできてきた。

そんな時に入ってきたのはパンダさんである。

彼女は30代前半で、結婚1年目ぐらいの新婚だった。

今のかみさんがその当時のパンダさんに近いのかもしれない。パンダさんという呼び名は彼女の体格が、コロっとしている所から着いたあだ名である。他の看護師さんと違って優しい彼女はパンダさんという愛称ぴったりのイメージだった。

ボクがパンダさんと仕事したのは最初の数回だけで、あとは当時新人だった運転手の黒石さんと仕事をしていた。

ボクは営業所の誰と仕事しても仲良くしていたし、パンダさん以外の看護師さんと仕事してもうまくやっていたので当時の営業所長は黒石さんの性格と仕事の兼ね合いを考えてそうしたのだろうと思う。

黒石さんは当時35歳の男性だったが、人から間違いを指摘されると、むすつとするとところがあつた。

以前に下橋さんという美人のヘルパーさんに怒られて、ぶすつとして、その後何も話さず帰ってきたという問題児である黒石さんは、当時の営業所長の悩みの種だったに違いない。

それに下橋さんはやたらめったら怒る人ではない。

何か意見を話す時もちゃんと筋を通して分かりやすく説明してくれる人だった。そんな下橋さんに言われてそこまで怒る黒石さんと、ボクが一緒に仕事している看護師のヒロコさんや、ヘルパーのアズ

ーがぶつかることは必死だったに違いない。

ヒロコさんにしても、アズーにしても、介護従業者の女性にはありがちな気の強さを持っており、しかも二人ともかなり短気なのである。

ボクの記憶が正しければ、そんな兼ね合いもあって、黒石さんは圧倒的に下橋さんとパンダさんと3人で組まされることが多かった。パンダさんは優しいので下橋さんと同じように、黒石さんに何か言わなければならぬときにも、人間関係を壊さない程度にちゃんと話してくれるはずであることを、当時の所長は考えてこの組み合わせにしたに違いない。

それにしてもボクは今、黒石さんの歳になっているが、例えば入浴をもう一回やったとして、湯温のことや利用者の家に行く経路のことなど、別にヘルパーさんや看護師さんに言われても怒ることはないだろう。

そうやって考えてみると黒石さんには悪いが、彼は年齢にしたら子供だったんだな・・・と今になって思う。

ところで、ボクはパンダさんが好きだった。

これは間違いない。

冒頭に話した初恋の、鼻をくすぐるような微かな甘い香りがするような想いではない。

これはもう完璧に好きで『恋』だった。

いくらボクが釣り好きでも『鯉』ではない。

誰がなんと言おうとも『恋』だったが、苦しい片思いだった。パンダさんは新婚でご主人もいる。

そして幸せそうだった。

ボクが入る余地はなかった。

もちろんボクはあきらめた。最初から自分の想いに蓋をしていたので、なんだか鬱々したそんな気持ちだった。

ボクがそんな想いに決着をつけたのはどうやったか・・・というところパンダさんにいろんな仕事上の悩みを聞いてみたりしたのだ。もちろん仕事の話なので仕事の合間に相談するわけで、3人一組のこの仕事では2人きりになることはなかった。そして前述したようにパンダさんは黒石さんの車に乗ることが多かったので話す機会も少なかった。

パンダさんからすれば8歳下の男性など、弟みたいなもんだっただろう。

そんな少ない機会に、実に親身に相談に乗ってくれた。それだけでボクは幸せだった。

パンダさんはその後、オメデタで会社を辞めていった。

『子供がほしい』といていたパンダさんはとても幸せそうだった。その後、ボクは会社から営業所長代理という役職につけていた。た際に、あまりに看護師がいなかったので、つい勢いでパンダさんに電話してみたことがある。

女の子が生まれたとのことだった。

きっとパンダさんのような優しく誰からも好かれる女性に成長していくだろうとボクは思った。

パンダさんは終始幸せそうで、ボクの片想いはその時に終わった。

アヤコちゃんの憂鬱

3、アヤコちゃんの憂鬱

ボクが昨年書いた小説で『化け猫の憂鬱』という小説があるのだが、そこに出てくる主人公のアヤコという看護師は、実は訪問入浴時代の同僚である。

コーギー犬の平九郎はボク自身がモデルなので、アヤコとのかけあいは書いていてあの頃を思い出して楽しかった。

パンダさんと違ってアヤコちゃんに関してはまったく好きとかそういう気持ちはなかった。

ただ、彼女は初めてできた女友達だった。

訪問入浴を始めて半年ぐらいで、ボクがまだ不慣れながらも少しずつ仕事に慣れはじめてきた頃、彼女は入社してきた。

当時、准看護婦だった彼女は正看護婦になるために学校に通いながら、訪問入浴は休みの日にバイトでやるとのこと、当初、土曜日をお休みをしていたボクはアヤコちゃんと仕事することはなかった。

始めて彼女と仕事したのはいつ頃だったか・・・そしてどんな感じだったかは覚えていない。あの頃は、ちょうど仕事のコツを覚え始め、あんなに苦痛だった訪問入浴が楽しくなってきた頃だったのでとにかく充実していたことは覚えている。

そしてアヤコちゃんの仕事ぶりはとても良かったように記憶している。

分らないことがあれば、先輩の看護師に聞くようにしていたし、自分の仕事ではない雑務に関しても進んでやっていた。

そんな彼女がボクとお似合いだという話が出たのは、彼女が入って

きて数カ月後の話だった。彼女ののりの良いキャラクターはボクにとって受け入れやすく、むしろ好きだったが、恋愛の対象かといえ
ば、それは否だった。

恐らく彼女もそう思っていたに違いない。

そんな話があってもボクもアヤコちゃんもお互いよそよそしくなる
風でもなく、同じ感じで仕事していた。

そんなある日、当時の横浜営業所の所長として上原さんという人が
やってきた。

その人は非常に穏やかな人で、みんなに好かれる人だった。

独身の上原さんに何かを持っていくという企画をアヤコちゃんはボ
クにもちかけ、ボクは自家用車で藤沢にあるアヤコちゃんの自宅ま
で車で彼女を迎えに行き、そこから磯子の上原さんの家まで行くこ
とになった。

ただ・・・たとえばアヤコちゃんとは言え、仕事以外で女の子と二人
きりでどこかに出かけるということはボクの人生では始めての出来
事だったので、どうもボクは恋愛めいたものを意識せざる終えなく
て、その日はなんだか落ち着かなかった。

一応、車は掃除しておこうと思い、中を片付けキレイにし、芳香剤
をおいておいた。

よく考えてみると、二人きりで行動するのはその時が始めてだった。

なんだかふわふわした気持ちだったが、運転しながら二人で話して
いるうちに、仕事の時と同じような会話になっていき、最初にボク
が感じた緊張は、上原さんに物を届けて、アヤコちゃんを送って帰
る頃にはまったくなくなっていた。

その時、帰りに食事ぐらいしておけばよかったな・・・と今思えば
ちよっと後悔している。

デートという言葉を『恋人とどこかに行くこと』と定義せずに、『親族以外の異性と二人きりでどこかに行くこと』と定義するなら、ボクの人生初のデートのお相手はアヤコちゃんだったのである。

その後、アヤコちゃんは学校を卒業して、無事、正看護師になって藤沢のある病院に就職したのだが、訪問入浴が楽しいと自分でも言うていたので休みのたびにバイトに来ていた。

しかし、それも彼女の仕事が本格的に忙しくなるにつれて少なくなっていく、ついに彼女は完全に訪問入浴を辞めて行った。

彼女と最後に話したのは、そのあと数年後のことであるが、実は、これにはちよつとしたこぼれ話がある。

先ほど話した上原さんは数年後に会社を辞めていった。

介護保険の導入は現場に大変な混乱をもたらして、多くの人材を彷徨わせた。

まさか上原さんが辞めるとは思ってもいなかったが、彼は会社を去っていったのだ。彼がヘルパーのアズーと結婚したと聞いたのは、退社の数ヶ月後の話だった。

上原さんが辞めたのは結婚が理由ではない。

会社のやり方についていけないと彼はボクに言っていた。

真意かどうかは分からないが……。

その話を聞いた数日後……。

ボクの携帯が鳴った。

『もしもし……。』

『あ、阪ちゃん？』

電話の向こうから聞こえたのはアヤコちゃんの声。

『お、久しぶり。どうしたの？』

『いや……なんとなく……その……悩みがあつて……。』

その時、アヤコちゃんは仕事のことで悩んでると言っていた。

看護師の仕事のことはボクでは力になれないし、話を聞いてあげるぐらいしかできなかったが、のりの良かったアヤコちゃんらしくない、なんとも歯切れの悪い受け答えだった。

結局、話も中途半端のまま、彼女は『聞いてくれてありがとう。』と言って電話を切った。

アヤコちゃんとの会話はこれが最後だった。

その後、ボクはヘルパーのアズーから、アヤコちゃんが上原さんのことが好きだったという話を聞いた。

当時は何も感じなかったが、アヤコちゃんの友人として、また良き同僚としてもアズーの無神経さにはあきれるばかりである。こんなことがボクの耳に入ったら知ったら当時のアヤコちゃんは傷ついたかもしれない。

ボクに電話をしてきた時・・・。

もしかしたらアヤコちゃんは何か愚痴を言いたかったのかもしれない。

正直に『振られた。』と言わなかったところが実にアヤコちゃんらしいのだが、ちゃんと言ってくれたところで、ボクに何かできるわけでもなかったの、あれはあれでよかったのかもしれない。

アズー

4、アズー

訪問入浴を始めたときの話。

採用されたのは二人だった。ボクともう一人はアズー。

アズーは当時18歳で若かった。といってもボクも当時22歳だったから若いには若かったのだが、いかんせん十代ではなかったわけだ。

彼女は若いだけでなく、やる気があった。

そして彼女は背が170センチ近くあり、モデルのような体型をしており、かなりの美人であった。

同期で共に研修を受けた時はボクは少しうきうきしていたのは否めないが、そんな甘ったるい気持ちというのは仕事を始めた時はどこかに消え去ってしまった。

まったくやる気がなかったボクとはえらい違いで、彼女は就職する前にヘルパー2級の資格を取得していた。

そして彼女は強かった。

仕事でもたもたしていると誰にでも平気できつい言葉を投げかけた。

仕事をし始めたときは周りからもだんぜん彼女の方が重宝がられた。それとは対照的に、ボクは戦力にはならない感じだったから、以前、他の機会にも書いたことはあるが、一日も早く辞めようと思っていた。

そんな感じで仕事していたもんだから、やる気のある彼女にはボクの無気力な仕事にイライラが頂点に達してしたのであろう。

最初の頃、ボクは同期の彼女にさえ、怒られる始末だった。

『辞めよう。』と思ったのはリネン室でのアズーと下橋さんの会話を聞いてからだだった。

『今日も全然ダメ。』

『言ってもダメなのよね。』

『もう辞めればいいのに。』

こんなきつい会話だったかどうかは覚えていない。

でも、当時のボクが『辞めよう。』と思うには十分の出来事だったと思う。

今ならどうか・・・と聞かれるが、まずこういう会話になるような仕事を今ならしない自信がある。

だから考えてみればボクはかなり成長したのかもしれない。

もちろんこの頃には恋愛の甘い感情などはなかった。

『辞めさせて下さい。』と辞意を当時の営業所長だった仙波さんに伝えたのは月曜日の朝だった。当時、ボクはまだパートだったし、月曜日は休みだったのだ。

ちなみにリネン室での会話は金曜日だった。

自分の中では土曜、日曜とよく考えたつもりだったのだが、今思えば、考えたというよりはどうすれば辞めることができるかを考えたといった方が正解だった。

結局、仙波所長が粘り強く励ましてくれたおかげで、ボクは辞めずに現在も介護業界にしがみついている。

仕事の慣れてくるとアズーや下橋さんもボクを攻撃するのはやめるようになった。そして同時に職場の人間関係が良くなっていった。もちろんその間、ボクなりに努力はしたのだが、とりあえずその話についてはここでは触れないでおく。

同期ということで、仲良くなればアズーとはなんでも言える仲になってきた。

恋愛感情はお互いになかったのだが、同期で介護について熱く話せる相手であることは間違いなかった。

時には、仕事が終わった後など、事務所に残って仙波所長と3人で今後の介護について語り合ったこともある。

今では介護を辞めたくて辞めたくて仕方ないボクもそんな熱い時期があったのだ。

そんな折に、仙波所長は奈雲さんという美人の看護師と恋仲になってしまい、他のヘルパーや看護師が怒り出して、彼はつるし上げられてしまった。

奈雲さんは確かに美人だったが、ボクはタイプではなかった。どちらかといったらパンダさんのようにふくらした女性の方がボクは好みだったのだから、まあ、好みというのは人それぞれだな、と思う。

仙波さんがつるし上げられている頃に黒石さんやパンダさん、泉ちゃんなどが入社してきた。

鎌倉営業所もメンバーが様変わりしている頃だった。

その頃、アズーから会社を辞めることにしたという決意を一緒に呑みに行ったときに聞かされた。

『他の介護も見たい。』というのが彼女の意見だった。

向上心があって前向きで強いアズーらしいな、と思った。

そのとき、ボクは彼女には彼女の考えがあるんだし、仕方ない思っていたので特に止めることはしなかった。

ボクはアズーと次に再開するときには、お互い大きく成長して会いたいと思っていた。

しかし、アズーと再開したのは意外に早かった。

それは介護保険が始まった年。

アズーは鎌倉営業所に帰ってきたのだ。

ただ、彼女が帰ってきたとき、ボクは忙しくて彼女とゆっくり話すことはできなかった。その頃には仙波さんは会社を去っていった。

仙波さんはいいい時に辞めて行ったのかもしれない。

この年は忙しかった。

そして何をしていいか分からないぐらい、みんなが混乱していた。みんな病んでおり、この頃、横浜営業所の所長代理になったボクは年末、本当に会社を辞めようと思ったのだが・・・今度は社長に止められたので、所長から普通のパートに戻って残留することとなった。

その頃、アズーはまた会社を去っていった。理由は聞いていない。

というのはその頃はアズーは鎌倉営業所勤務でボクは横浜営業所勤務だったから話す機会もなかったからだ。

もし、介護保険導入の年でなければ、ボクは友人としてアズーに辞める理由を聞いていたかもしれない。

場合によっては止めていたかもしれない。

しかしボクにはそんな余裕はなかった。

余裕がないのはボクだけではなかった。

それだけ介護保険の導入は現場のヘルパーたちから余裕を奪ってしまったのだ。

ボクは彼女が辞めたと聞いたとき、これが最後でアズーとはもう会うこともないだろうと思っていた。

ところが、またまたアズーは戻ってきたのだ。

その頃になると鎌倉営業所もメンバーが当初とはガラリと変わっていた。

まず、初期のメンバーは下橋さんしかいなかった。

横浜営業所はなくなり、鎌倉営業所の所長だった上原さんは、ボクが横浜から鎌倉に戻ってきたときに辞めて行った。

後任の所長は黒石さんだった。

こんなことを言いたくないのだが、黒石さんには所長としての器うつつがないことは当時のボクにでも分かったから、恐らく本社は神奈川での営業展開をあきらめたんだと思った。

それでボクは、早々にそのころから辞める準備をしていた。

そんな折だった。

アズーが帰ってきたのは・・・。

ちなみにアヤコちゃんが歯切れの悪い電話をしてきたのはこの頃の話。

同じ会社に入ったり辞めたりすることはあまり好ましくないとボクは思う。

結局、ボクはこの年の年末、会社を辞めた。

風のうわさによれば、あのあと鎌倉営業所はなくなり、会社は神奈川からはすべて撤退したとのことだった。皮肉にもボクの予想が当たってしまったのだ。

その後、アズーがどこに行ったかは分からない。

二人のヒロコ

5、二人のヒロコ

ヒロコという名前はよくある名前だとこの頃のことを思い出すと強く感じる。

訪問入浴の仕事を始めて、最初の頃に入ってきた看護師がヒロコさんで、後に入ってきたのも看護師で同じ名前のヒロコさんだった。最初の頃に入ってきたヒロコさんはよくボクと組んで仕事をした。彼女は一年ぐらい続けたが、介護保険が始まってしばらくして会社を辞め、老人保健施設に就職していった。

最初のヒロコさんは天然ボケなところがあり、ボクらを大いに笑わせてくれた。

例えばこんな話がある。

ある利用者の家でのこと。

その利用者のうちはマンションの1階だったが、入浴者が家の前につけることができないので、自宅の給湯システムを借りて浴槽にお湯をためていた。ただそのマンションは給湯システムそのものが古く、水流の勢いがゆるく、お湯がたまるまでに時間がかかったのだ。

訪問入浴の仕事はお年寄りをお風呂に入れるだけが仕事ではない。いかに楽しく入浴の時間を過ごしてもらうかが大切なのである。

週に何回かの入浴が楽しみだ、といってもらうためには、ただ決められた仕事をこなすだけでは務まらない。

そこでスタッフはお年寄りをお風呂に入れながら会話をするわけである。

この利用者のお宅はお湯がたまるまでに時間がかかるのでその時間帯も話をした。話しの内容はたわいもないものが多い。

天気の話から日々のニュースまで・・・まあ様々だが、話をしな

がら利用者の趣味趣向をさぐりながら会話していくので、会話の技術は確実に向上するのだが・・・。

こういうことを書いているといつも思うのだが、保田くんやタダシロくんには間違いなく向かない仕事であることは明白である。

多分、当人たちも認めることと思うが、上記のような作業は、彼らにとってはかなり苦痛だと思う。

さて、その日もお湯がたまっている時間を利用してその利用者と会話を楽しんだ。ここで『楽しむ』という言葉を使ったが、確かに利用者との会話は楽しいのである。

それは人生経験豊かなお年寄りが話す言葉には含蓄があり、どんな話の内容にも『経験』というセピア色の味わい深さがついてまわるからである。

そう言う意味では、この利用者は趣味も多彩で、90を超える年齢ではあったものの、しっかりしており、ボクはこの家が大好きだった。

その日の会話は部屋に飾られていた絵画だった。

その絵画はどうやら息子さんが描いたらしいものだった。

カサブランカの絵だったが下に息子さんのサインがローマ字の筆記体で記されていた。

息子さんの名前は『tada shi』さんだった。

往々にして筆記体になると、字が崩れるので読み間違いはつきものである。

ヒロコさんは利用者さんにこう言った。

『息子さんの名前・・・じゃだしさんって言うんですね。』

筆記体の『T』を、ヒロコさんは間違えて『J』と読んでしまったことはすぐに分かったが、普通、前後のつながりを考えると『ただ

し』を『じゃだし』とは言わないだろう。
笑いをこらえきれずにずっと腹をかかえていたのは、ボクだけではない。

いつもは冷静な下橋さんでさえ、笑っていたぐらいだ。
最初のヒロコさんはそんな人だった。

最初のヒロコさんとは仕事の同僚という以外の感情は何もなかった。
彼女とは彼女自身の送別会で、泉ちゃんが暴れた際にボクに『明日、
早いんだけど帰っていいかな?』と遠慮がちに聞いてきたのを最後に
会っていない。

後のヒロコさんは介護保険導入直前に入社してきた。
話し方といい立ち振る舞いといい、かなり品のいいお嬢様という感
じだった。

仕事を一緒にすることが多かったのでボクは彼女とも話すことが多
かった。話しているうちに彼女の品のいい話し方や立ち振る舞いに
ゆるやかに引かれていく自分に気づいていた。

後のヒロコさんは謎が多い人でもあった。
付き合っている彼はいない様子だったが、それ以外はよく分からな
い人だった。そんな謎めいたところにも引かれて行ったのかもしれ
ない。

気が付けばボクは彼女が好きになっていた。

ただ、介護保険の導入は忙しさに拍車をかけていき、ボクはこの時
期、家に帰れず事務所で泊り込んで仕事することが多かった。そん
な毎日だったが、彼女が事務所にやってくることを考えたら、そん
なことはなんの問題にもならなかった。

不思議と疲れも感じなかった。

他の場所でボクが世界一キライなものは『仕事』であると言った。
あの頃は違った。

もちろん恋をしていたから、浮かれていて、変な麻薬のようにボクの気持ちのつらさを麻痺させていたこともあるかもしれないが、それだけではなく、ちょうど『介護』という仕事の面白さを存分に感じ始めた頃だったからということも言えるかもしれない。

その頃は、バラ色の毎日だった。

楽しい毎日はそう続かなかった。人生には楽しい時期と苦しい時期が交互に来るようになっていくのかもしれない。問題は苦しい時期にどう過ごすかが重要で、そこで自分に投資できるような生き方ができれば、楽しい時期が間違はなくやってくる。

逆に楽しい時期に苦しい時期の準備をしておけば、苦しい時期を乗り越えるのは容易になっていくのだ。

楽しい時期にちゃんと備えておかなかったボクはこの後きた苦しい時期を乗り越えることができなかった。

備えておけなかった・・・つまり俗に言う『恋にうつつをぬかす。』という奴だ。

歯車がおかしくなっていたのは、ボクの後輩が入ってきてからだ。後輩と言っても、ボクよりかなり年上の男性で、黒石さんよりも上の人だった。

井岡さんという名前だった。

井岡さんはボクの言うことを聞かない人だった。

考えてみればボクの話し方も悪かったのかなとも思うが、指示を指示通りやらない人であるという印象が強い。

と言っても今のボクなら多少指示通りにしなくても、致命的な失敗さえしなければ笑って済ませるところだが、その頃のボクは融通を効かせることができない、プライドだけが高い若造だった。

そして、たった1年仕事をやっただけで、一人前になったのだ、と勘違いしていた。

親子ほど年の違う井岡さんはそのことに気づいていたのかもしれない。

井岡さんとはにかくボクの指示に従わなかったし、仕事に関してもあまり積極的とは言い難かった。

ただ、人生経験の豊富な井岡さんは力の入れどころをよく知っていて、すべてを適当にやるのではなく、人間関係を良好に保つのに必要な部分に関してはしっかり仕事をしていた。

彼の口癖は『仕事はそんな力を入れてやるもんじゃない。』ということだった。まったくと言っていいぐらい今のボクに近い形なのだが、井岡さんとボクの違いは向上心があるところだ。確かに、仕事はそんなに力を入れてやるもんじゃないということには同意できるが、ボクの場合は仕事で楽するために、自分なりに勉強して積極的に備えるという部分がある。井岡さんの場合はそうではなく、面倒な仕事をやらされるぐらいなら、辞めてもいいという考え方だ。

今考えても彼とはその部分における考え方は平行線で交わることはないと思っている。

つまり『楽しいときに苦しいときの備えをしておく』ということとは井岡さんには見られなかったということである。

さてどう歯車がおかしくなったのか・・・。

そしてそのころ、ボクと井岡さんとヒロコさんで現場を回ることが多かった。

井岡さんは一緒に乗る人との雰囲気壊すことはなかったから、ヒロコさんとも仲良くしていた。

ボクはそれがさらに気に食わなかった。

そんなある日、井岡さんが事務所でみんなと一緒に話しをしていた。ある利用者さんの名前の読みと漢字が分からないというところで盛り上がっていたのだ。

これにはさすがのボクも頭に來た。

というのは利用者の名前など、ファイルの中身を確認すればすぐ分かることである。

しかも分らないことを一生懸命調べようとみんなで試行錯誤しながら、その途中の作業で面白いことがあつての笑いや盛り上がりなら分かる。そのときの盛り上がりはそうではなかった。

『こんな漢字読めねえよ。大体こんな漢字使うなっつうの!!』

井岡さんがポンっとファイルを投げると、それを見たヒロコさんを含め、数人のスタッフが大笑いしていた。

その利用者のファイルにはテプラで適当に間違えた名前が、本当に雑に切り貼りされていた。

朝一で訪問している利用者さんだったが、感謝してくれる利用者さんの顔や家族の顔を思い出すと、たかだか1ヶ月ぐらい前にこの仕事を始めて、しかも向上心がない井岡さんに、この利用者さんの名前を笑う資格はないと思った。

『何がおかしいんですか？利用者さんの名前を笑うなんて最低ですよ!!』

『何だよ。急に。』

『利用者の名前ぐらいちゃんと覚えてください。井岡さんだって名前間違えられたら嫌でしょ！利用者さんもそれは一緒です！こんなことを笑いのネタにするぐらいなら辞めたほうがましですよ!!』

うーん。

こうやって振り返ってみるとボクは真面目だったのだな・・・とあらためて思う。

ただ今のボクがこういうことをするか・・・と言うとやはり否である。

じゃあ、利用者さんの悪口は一切言わないんですか？と聞かれると困る。

確かにボクはよく利用者の悪口を言う。

しかしそれは言わないと自分がおかしくなるからだ。

あのころと違って、ケアマネジャーの仕事では、感謝してくれる利用者さんばかりではない。自分のことしか考えず、自分の意見が通らなければ声高に文句を言う利用者さんも多いのだ。

そんな利用者さんに対してあの手この手でなだめすかしながら、なんとかサービスや病院につなげなければならぬ。

非常にストレスが溜まるのである。

だから事務所でそう言った利用者さんの悪口ぐらい言わなければ、自分の気持ちのはけ口がなくなってしまうのだ。

あの時の井岡さんはそんな意味で笑ったのではない。

ただただ・・・事務所での自分の場所を作るためだけに、その場のノリで利用者さんの名前を使ったのだ。

今考えても、当時のボクが怒った理由がよく分かる。

そして、今でも怒るだろう。

当時、所長だった上原さんは、完全にボクの嫉妬だと言った。

嫉妬もあったかもしれない。

ヒロコさんを井岡さんに取りられてしまった感じがして、ボクは寂しかったというのも事実だ。

でもこの件はそういうことではないことは、今になって冷静にものを見れるようになった今こそよく分かる。

その後・・・。

ヒロコさんからボクに電話があった。

『もう井岡さんとはうまくやるつもりはないんですか？』

間の抜けた質問である。

なんと答えたかは忘れた。

ただ怒りが収まらないボクはヒロコさんにも怒りをぶつけた覚えがある。

一緒に笑っていたヒロコさんが許せなかったからだ。

結局、数日後・・・ヒロコさんは会社を辞めることになった。

怒ったものの、まだヒロコさんが好きだったボクは意を決して自分の気持ちを言うつもりだった。

ヒロコさんを食事に誘おうと思い、彼女の携帯に電話したが彼女は電話にでなかった。

なんだか自分の気持ちを見透かされた感じがしてもうどうでもよくなつたのを覚えている。

ボクの恋は終わった。

なんだか締まらない恋の終わりだった。

終わって見ると、なんでこの人のことが好きだったんだろう・・・
と思ってしまうている自分がいた。

案外、恋の終わりというのはそういうものなのかもしれない。

イズミちゃん

6、イズミちゃん

今までであった中でもイズミちゃんほど個性的な女性はいなかった。リアクションから話し方、考え方、そのすべてにおいて個性的だった。

最初に会ったのは、ボクが訪問入浴を始めて1年ぐらいの頃だった。イズミちゃんはボクの仕事ぶりをやたらと褒めてくれた記憶があり、ボクはこの1年間、怒られることにビクビクすることはあっても、手ばなしで褒められたことなど少なかったから、それがすごく嬉しかった記憶がある。

なんとなく自分の仕事が認められた気がしたのだ。

でも今考えるとそれは違ったのかもしれない。

うちのかみさんは今、施設勤務だが、かみさんがやはり一回りぐらい若い男の子を『若いのにしっかりしてるしがんばっている。』とよく褒めている。

ボク自身もかみさんの話を聞く限りは、その彼はすぐできる子だなあ・・・と思う。

ただ、それは『その若さでよくがんばっている。』ということであって、完璧な仕事をしているということではない。そこには経験から来る良さは当然ながらないし、やはりそういった意味では荒削りではある。

もちろん完璧な仕事なんて今だにボクはできないし、今後も無理だが・・・10数年前に比べたら、経験も積み、いい仕事ができるようにはなったなあ、と思っている。

つまりそういった経験はないものの、今後経験を積み、いい風に成長するよ・・・という意味で褒めているのである。

ボクはそんなことも分からずに、自分の仕事は完璧だとうぬぼれていたわけである。

ボクとイズミちゃんは一回りぐらい歳が違った。

当時、ボクは23歳、イズミちゃんは32歳。

今、ボクは当時のイズミちゃんの歳になっているから、今になって、イズミちゃんがこのときボクを褒めた感じがよく分かる。

話を元に戻そう。

イズミちゃんに褒められたボクはいい気になっていた。

この頃のボクは何をしてもうまく行くような気がしていた。仕事において失敗を考えたことのない時期というのは後にも先にも、この時期しかない。

イズミちゃんに対して片想いのような気持ちはなかったが、ちょうどその頃、会社には30代の女性が多く、女性が多いということは色恋沙汰の話で盛り上がったたりもするわけで、彼女のいないボクは格好のネタになったわけなのだが、決して自分たちからボクに女の子を紹介するということとはなかった。

恐らく彼女らはただ話して楽しみたいだけで、そんなめんどくさいことはまったくするつもりはなかったのだらうと思う。

色恋沙汰といえば、その頃である。

鎌倉営業所で、仙波さんと奈雲さんの噂が立ち始めたのは・・・。

ボクの色恋沙汰なんて、まったく皆無で、出会いもなかったわけだから、せいぜい『アズーやアヤコちゃんはどうなの？』と勧められるのが関の山であって、彼女らからするとボクの話をしていてもたいてい盛り上がりもなく、面白くなかったに違いない。

ボクが保田くんの色恋沙汰の話を聞いても何一つ盛り上がらないのと同じである。

つまり色恋の話がまったくない人から色恋の話を聞くほど、退屈なものはないのである。かと言って当時のボクは話題性もなかったか

ら、仕方なく、ない恋愛話を膨らませてくれていただけなのである。ボクのそれに比べると営業所長のスキャンダルは大変面白かったのかもしれない。

もっとも……。

彼女らからしてみれば……『面白がるなんてとんでもない、会社のためにあたしたちは訴えているのよ。』ということだったんだろうけど……。

仙波さんと奈雲さんの話のおまけのようにボクの話が話されるので、今まで女性と縁のなかったボクはその手の話しに免疫がないだけに、もしかしたら彼女ができるかもしれないと思い有頂天になってしまった。

イズミちゃんと出会ったのは、ちょうどパンダさんと出会った時期と重なる。

二人は同期なのである。

そんな有頂天な時期だったから、ボクが成就するわけもないのにパンダさんが好きになったのもなんとなくずけるかもしれない。

ただ……こういった話をされてもまったく有頂天にならないタイプの男もいる。

ある程度、女性と付き合ったことのある……所謂女性経験いわゆるの多い……恋愛偏差値の高い男なら、こういった話には有頂天にならずに、粹な答えの一つも返すことができるだろう。

逆に、女性経験がまったくなくても、たいして彼女がほしいと思っていない、今流行りの草食系男子も、こういう話に有頂天にはならないだろう。

ボクの友人である保田くんがこのタイプである。

まあ……彼の場合知らない人と話すぐらいなら彼女なんかいらないというタイプだから草食系とは違うのかもしれないのだが……。

あの頃の仕事は『仕事Ⅱ恋愛の始まり』だった。

だから仕事は楽しかった。

毎日、仕事するたびに、何かうきうきするような出来事があるのでは？と期待していた。

考えてみれば、この頃が一番、仕事に対しては軽い考え方をしていたのかもしれない。

いや・・・まったくもって恥ずかしい話である。

そんな毎日だったのだが、その頃は人の出入りは激しかった。

先に話した、ボクが片想いしたヒロコさんが入社し、短期間のうちに辞めて行ったのはこの頃の話である。

そしてもう一人のヒロコさんが辞めて行ったのもちょうどこの頃の話だった。

もう一人ヒロコさんは、みんなから好かれていて、しかも長く働いていたので送別会が開かれてボクはその送別会に参加した。

その反面、ボクが片想いしていたヒロコさんは、みんなからの評判がすこぶる悪かった。

あからさまにそれがはつきり分かったのは、送別会の時だった。

『なんだかさあ！！阪上くんとメールなんかしちゃって！！』

イズミちゃんは目が据わっており、ボクは無理やりイズミちゃんの隣りに座らされた。

ボクはそれを聞いてビックリした。

仙波さんと奈雲さんの件を見ていたから自分の恋は片想いとは言え、ひた隠しにしてきたつもりだったのに・・・いとも簡単にイズミちゃんにバレていたことには驚いた。

でもその頃にはボクの片想いは終わっていたので、そんなことをこんな席でいちいち言われたくもなかった。

こっちはしまりの悪い片想いが終わって、傷ついてはいないものの、

そう言う話は蒸し返してもほしくない。

でもイズミちゃんは入社当初、ボクのことを褒めてくれたものの裏返しか・・・裏切られたという思いがあったのか・・・ずっとボクに絡んできた。

ただイズミちゃんは結婚もして子供もいるんだから、ボクからしてみればイズミちゃんにそんな感情をもたれること事態、非常に心外で『ほっといてくれ。』と言う感じではあったのだが、彼女からしてみれば歳の離れた弟を見るような気持ちだったのだろう。

一回りも年上にもかかわらず、ボクがここでイズミさんではなくイズミちゃんと呼ぶかというイズミちゃんが酒にだらしないからである。

もちろんボクも人のことは言えないのだが、ボクの場合は基本的には人には迷惑をかけないが・・・イズミちゃんの酒乱ぶりはすさまじかった。

ボクはその送別会の中で、ずっとイズミちゃんから、恋愛とはなんぞやということを説教され、最後には『あたしが阪上くんを褒めたのは間違이었다。』とまで言っていた。

彼女はその後、散々暴れて、しかもそれをたきつけたと思われる黒石さんを初めとした連中はさっさと帰ってしまったのだが、ボクは暴れるイズミちゃんを引っ張って事務所まで連れて行った。

と・・・こう書いたら簡単に見えるが、居酒屋から事務所までのほんの15分ぐらいの間にどれだけ車に轢かれそうになったか・・・。

何故、事務所に向かったかという、それはただ単にボクがイズミちゃんの家の電話番号を知らなかったからである。

その頃には仙波さんは会社を辞め、奈雲さんもいなくなっていたから、事務所には新しく所長になった上原さんと本社から来ていた谷

川部長がいた。

実は、介護保険導入の一年目でみんな忙しく働いていたのだ。

ボクも連日、忙しく手伝ってはいたのだが、谷川部長がお金をボクにもたせて『行ってこい。』と言ってくれたのでこの送別会には参加したのだった。（もちろんそのことはみんなに話して、会計の際はお金を払った記憶がある。）

ボクは二人に事情を説明して、イズミちゃんを事務所において、すぐにパソコンのデータベースからイズミちゃんの家を電話をして、ご主人に挨拶をして、迎えに来てもらえるように話したのだった。

その間もイズミちゃんは休むことなく、ずっと何かを上原さんと谷川部長に絡んでいた。

本当に大変な夜だった。

とにかくこのあと、イズミちゃんのご主人がやってきて、なんとか事は収まった。

そんなひどい思い出ではあるが、今から考えると懐かしい思い出はある。

ただ、もう一度、こういうことをしたいかといえば・・・答えは否であり、なんだかどうも複雑な思い出の一つとなっている。

ちなみについ最近の話ではあるが、仕事でイズミちゃんに再会した。やはりイズミちゃんがボクに対する接し方は、歳の離れた弟のような接し方だった。

そういうイズミちゃんの接し方に、当時は気づかなかったので、ボクもその分、大人になったのだと実感した。

みさ姉

7、みさ姉

昔の話をすると、うちのかみさんはあまり良い顔をしない。

なぜかと言うとかみさんは非常に真面目だったらしく、例えば先に話したイズミちゃんのように酒を呑んでそれで失敗したことなんかない。まあ・・・それ以前に彼女は呑めないのだが・・・。

とにかくうちのかみさんにとって、呑んでわーわー騒いで、深夜、電車がなくなつてタクシーで帰ってくるなんて話は考えられないらしい。

そんな話をボクがするたびにかみさんは良い顔をしないのだ。

しかも良い顔をしないだけならまだしも、『あたしもっと遊びたかった・・・』と柄にもないことを言い出すので困つてしまう。

そんなわけでこのみさ姉の話をここで話しているのがかみさんにはばれたとしたらきっと彼女は良い顔はしないはずである。またこうやって自分が悪い意味でネタにされていることも良い顔をしない。

ただうちのかみさんのいいところはその真面目さであり、ボクとしてはそこが良くて結婚したので、あまり過去の話をしただけで不機嫌にならないでいたありがたいものはある。

さて、みさ姉と出会ったのは横浜営業所がなくなつてボクが鎌倉営業所に帰ってきた頃の話だった。

その頃の鎌倉営業所は初期の社員は少なくなっていた。

黒石さんが所長になって、ボクはひそかに会社には見切りをつけてはいたのだが、ただ、毎日仕事はしっかりしていたのは覚えている。この時期になると色恋話をされたからといって有頂天になることもなく、毎日の仕事をただただしっかりとこなしているつもりだった。つまり・・・と言ったのは、その頃のボクは1年という短い期間に

2回も失恋しており、その寂しさを紛らわせるためにも仕事に打ち込んだのだが、それが原因で精神的にも身体的にも追い詰めてしまい、年末には身体を壊してしまっていたからだ。

そうになった一つの要因は届かぬ恋心だったわけで、そういう思いを持ち続けることによってそんなひどい目にあうのなら、そういう色恋沙汰は心の中から打ち捨てていこうと思ったのだ。

大体、ボクはすぐにやけになる傾向にあって、この頃は片想いをしでは、『どうせかなわない恋だから・・・』と勝手にあきらめて、やけになって他の事で気持ちを紛らわせようとする傾向にあった。そんな感じで、片想いのその想いを伝えないままあきらめてしまうのだから、どうしても自分の中で整理がつかないのだ。

そんなモヤモヤした気持ちをいつまでも引きずっていたから、精神的にも身体的にも自分を追い詰めてしまったに違いないと今では思っている。

横浜営業所が閉鎖され、鎌倉営業所にやってきて、メンバーも様変わりしていた。

新しく見るメンバーもあり、運転手の上村くんやヘルパーの生田さんなどは、始めてみる顔だった。

所長の上原さんは会社を辞め、そのあと黒石さんが鎌倉営業所の所長になった。

そんな折に新しく入ってきたスタッフの一人がみさ姉だった。

みさ姉はその当時、イズミちゃんと同じぐらいの歳で、元ホステスだった。

イズミちゃんやパンダさんは看護師だったが、みさ姉はヘルパーだったのでボクとは話もよく盛り上がった。ヘルパーと看護師はどうしても同じ仕事をしていても観点が違うので、話が食い違うことが多いのだ。

それに看護師は基本的に介護職を看護助手がやる仕事だと思ってい

る節がある。

もちろんみんながみんなそうではないのだが、多く見られる傾向ではあり、イズミちゃんに至ってはその傾向が強かったように思える。

ボクはその頃、仕事を始めてちょうど3年目だったので、酒の席でも仕事の話であつく盛り上がっていた。特に介護職同士だと話は盛り上がった。

ちなみに今はそういう飲み会の席で仕事の話をすることはほとんどない。

力の入れ加減を間違えるとこの仕事は長続きしないということを長年の経験から学んだからだ。

自分で言うのもなんだが、みさ姉はボクのことを好きでいてくれた。しかしボクはというと・・・バツが3つもついていて、しかもその時も独身ではなく結婚しており、子供の2人いるような女性に・・・いくらボクがもてないとはいえ好きになるわけがない。

みさ姉に関しては恋愛対象ではなかった。

あくまで職場の仲の良い同僚の域を超えることはなかった。

みさ姉との思い出は呑みに行ったことが多い。

よく毎晩呑みに行った。

一緒に行くのは生田さんや、新しく入った運転手の小山さんが多かった。

みさ姉もイズミちゃんに負けないぐらい酒癖はあまりいい方ではなかった。

大体、小山さんとケンカすることが多く、ボクが『まあまあ・・・』と間に入ることが多かった。

話の内容は仕事の手順のことや、黒石さんのことだった。

黒石さんは自分が新人の頃は、けっこう周りを困らせたにもかかわらず、自分が所長になったあとは新人に厳しいことを言っていたら

しい。

一度なんか、飲み会の席で新人の女の子にやたら偉そうに話をしていたもんだから面白半分に『黒石さんも新人の頃は同じような失敗してたから気にしなくてもいいよ。』と言ってやったことがある。とにかく黒石さんという人は管理職には向いていなかった。

なにせ、優しいなら優しく、厳しいなら厳しく、メリハリをつけて部下に接すればいいんだけど、何かにつけて指示が中途半端だったから、彼の下で働くのは苦痛でしかなかった。

だからみさ姉とは呑みに行っては黒石さんの文句を言って盛り上がっていた。

そんな状態だったから黒石さんに対する不満がボクの中では日に日に大きくなっていった。ただボク自身も当時は未熟で、今から考えると黒石さんの無能さをフォローするぐらいの仕事はできていなかったのである。

ボクがもっと大人になって、それこそプロフェッショナルに徹して仕事をすれば、もう少し黒石さんともうまくやって行けたんだろうとも思うが、若くて未熟な当時のボクにはそれができなかった。

ボク自身、この時期は自信満々で、自分はどこに行っても必要とされる人間で、黒石さんなんかに使われているのはふさわしくないとまで思っていた。

今から考えると随分バカな話である。

そう考えると、ボクが仕事で失敗して、その家の人からクレームが来たのも当然といえば当然だったのかもしれない。

そのあと・・・。

ボクはクレームに対して、クレーム報告書を上げた。

クレーム報告書に関しては、クレーム自体を責めるものではなく、失敗の再発を防ぐものだったから、ボクは自分がしでかしたことを

真正面からとらえて悪かったところ、反省し今後改善していかなければいけない点などを記載して提出した。

それから数日たって黒石さんはボクに勝ち誇った顔をして社長の直筆の指示を見せた。

なんて書いてあったかは忘れたが、確かボクのことは今後戦力とは考えないように・・・というようなことが書いてあった記憶がある。これに関しては今考えても忌々しい。

確かに失敗は失敗だし、それ自体は良くないことである。

しかし、それを包み隠さず、クレーム報告書に書き、しかも誓って言うが、クレーム報告書に書いた内容の反省点や改善して行きたい点に関しては、本当にそうしようと思いつながら書いたものなのであるにもかかわらず、その真偽も確かめず、戦力外通知を出すなんて、ホントに腹立たしい！！

ボクはショックが大きかった。

それを見せられた時は何も言えなかった。

冗談じゃない。

ボクは黒石さんが定時でさっさと帰っていた介護保険導入時のあの混乱期も、一週間以上、事務所で泊り込んで仕事をした。しかもその時の残業代は一切もらっておらず、それはすべてサービス残業でやったことなのだ。

会社には随分、尽くしてきたつもりなのに・・・。

たった1回のクレームで・・・仮にそれが初歩的なミスだったとしても・・・戦力外を通告されるような仕事は今までしてこなかったはずだ、とそのときは思った。こうやって昔のことを思い出して書いている今でもこの件に関してはあの時と同じことを思う。

次の日。

ボクは黒石さんに辞表を出した。

正社員だったので30日前に退職願を出すのが通例ではあったが、そんなことはどうでもよかった。ボクとしては月末まで残りの15日ぐらいで辞めてやるのがせめてもの会社に対する仕返しだった。確か時期的に年末だったので、12月29日かそこで辞めた記憶がある。

辞表を出した時の黒石さんのしたり顔は忘れない。

彼は事あるごとに言うことを聞かないボクを辞めさせたかったのかもしれない。

黒石さんはしたり顔だったが、ボクはそんな黒石さんを見て『やはりこいつはアホやな。』と思った。

というのは、当時ボクは訪問介護の手伝いをしており、ボクが抜けたらその抜けた分を埋めるヘルパーはいなかったからだ。

それだけ黒石さんは全体の業務を見通した判断ができなかったのだ。本当に管理者失格である。

辞表を出して2日後くらいだっただろうか。

黒石さんはボクを別室に呼んで言った。

『井坂に相談したんだが、おめえが抜けちまうとしばらく仕事が回らなくなるらしいんだよ。だから辞めるのは来年の3月に……。』ボクはその言葉を聴いて……。『今更？』という感じだった。

普通、ちよつと考えれば……。サービス提供責任者に相談しなくても分かることである。

ちなみに井坂というのはアズーの名字である。

その頃はアズーがサービス提供責任者だった。

サービス提供責任者というのは、ヘルパーのシフトを管理したり、教育したりするポストのことで、ヘルパーたちのリーダー格の人間である。

ボクの仕事は介護保険の請求業務と、全体の業務で足りない部分をヘルプすることと、経費の管理だったので訪問介護に関しては完全

にヘルプで携わっていたのだが、所長もサービス提供責任者もその自覚はまったくなかったらしく、新しいヘルパーも入れようとせず、ボクをこき使っていたのだ。

ボクにはそれが分かっていたから、会社の心無いやり方に対する仕返しで、後任が来る前に辞めてやろうと思ったのだ。

『そんな都合のいい話がどこにあるんですか？ボクはあてにしないように社長直々のご沙汰じゃないですか。忠実なイエスマンの黒石所長はそれに対してイエスとしか答えられなかったんでしょ。言うておきますが、ボクは12月29日以降は土下座されても出勤しませんからね!!』

・・・えーと・・・。

こんな激しいことはたぶん言ってません。

これを書いている時にこのぐらいいは言ってやればよかったと思ったので・・・書いてみました。

とにかく、ボクは黒石さんの言うことは一切聞く耳を持たず、しつかり12月29日で辞めたことを覚えている。

最後の出勤の日に黒石さんは苦虫をつぶしたような顔をしてボクをみんなの前で『愚か者!』と罵った。

今、これを書いている時点でボクはあの時の黒石さんの年齢になっている。

ボクが管理者なら、どんな事情があれ、みんなの前で個人を・・・しかも自分より一回り若い奴をなじったりはしないだろう。(もつとも、叱ることはあるかもしれないが・・・辞めていく奴をつかまえていちいち罵るようなことはしない。)

なので間違はなくこれは断言できるが・・・愚か者は黒石さんの方だと思う・・・。

さて、みさ姉に話を戻そう。

ボクが辞めることになって、みさ姉は小山さんと一緒にささやかな

がら送別会を開いてくれた。

それまでも一緒に深夜に至るまで呑んだが、彼女らとの付き合いはその日が最後だった。

みさ姉は最後にボクのために泣いてくれた。

過去、結婚を数回し、離婚も経験し・・・水商売も経験し・・・酸いも甘いも経験している彼女は、たぶん、かなり惚れっぽい人だったんだろうな、と思う。

みさ姉にはその後会っていないが、彼女が介護業界におり、くじけずにかんばっていることを願うばかりである。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1742y/>

恋に恋して

2012年1月13日16時49分発行